

緒方洪庵と適塾

清松 薫

(会員 佐伯市下城)

文祿四年(一五九五)、大友義統が朝鮮の役での敵前逃亡の罪で領地を没収され、身柄を毛利輝元に預けられる事になった時、佐伯氏も同罪として領地を没収され、母牟礼城最後の城主佐伯惟定は、伊豫の藤堂氏に迎えられ仕えるようになりました。

家臣たちは、惟定とともに行動した者、帰農した者や佐伯を去り各地に流れていった者等、離散してしまいました。その後、各地で頑張り活躍する様になりました。

この事については、平成三年三月に佐伯史談会の中に部会として、「豊後佐伯氏中世研究会」を創設して、初代会長に汐月三代吉氏、事務局長に佐藤巧氏が就任され、佐伯氏のその後について、調査・考証され、定

期的に各地の佐伯氏を訪ねていかれ、調査研究の報告を会報「豊後佐伯一族」と題し発行しています。

また、一年に一度(十一月二十五日)稲垣の龍護寺にて、大神氏の「御位牌祭り」を行い、各地から佐伯一族の末裔の方々も集まり交流を深めています。

私は、その会報を拝読させていただく機会がありまして、素晴らしい活動をされている事に感動いたしました。私にも刺激され、私も佐伯氏一族のその後について調べてみようと思いいちました。

そんな時、弥生の郷土史家古藤田太氏の発行された著書に、佐伯氏の後裔で江戸末期素晴らしい活躍をされた緒方洪庵の事が、簡単に紹介されています。私はもつと詳しく知りたいと思いい、少しずつ調べていくものです。

その緒方洪庵の本を読んで、その中から感動した事を紹介させていただきます。

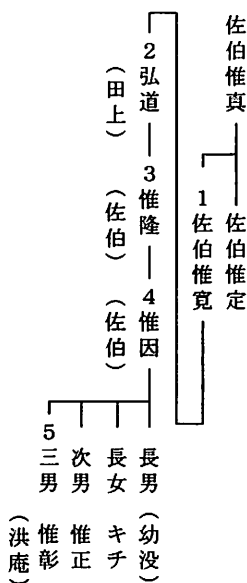
人の一生には誰でも必ず人生の転機があります。その転機にも良い転機ばかりでなく、追い風の時もあれば、向かい風や雨の日もあります。やってくる人生の転機を、いかに生きたか、それがその人の人生を大き

く左右する事もあります。

今からお話しします洪庵にも、五度の転機があり、その度、洪庵はその転機を存分に力いっぱい生き抜き、医者として、蘭学者として、教育者として素晴らしい功績を残されています。その足蹟を第一の転機から順を追ってお話しして参りたいと思います。

まず、最初に緒方洪庵系譜を見てください。

《緒方洪庵系譜》



佐伯氏十三代佐伯惟定が佐伯を去ることになった時、弟惟寛はまだ幼く、安芸国の毛利輝元を頼って行きました。成長した後、備中足守藩の木下氏に仕える様になり足守での「佐伯氏の祖」となりました。

その後、代々木下氏に仕え洪庵はその五代目にあた

ります。藩主木下氏は、豊臣秀吉の正室ねねの実家であり、徳川時代には外様大名でした。

足守藩は、現在の岡山県岡山市足守二〇二三番地にあり、岡山市内から十六キロメートル程離れています。当時の石高は二万五千石でした。

佐伯惟寛については、佐伯氏系譜にその名前を見る事は出来ませんが、今後研究を要する課題だと思えます。

洪庵は生涯、佐伯と田上と緒方の三つの姓を使っていますが、この三つは一つにつながる姓なのです。

九州豊後に緒方を名乗る豪族がいましたが、その一族がその後佐伯荘に住み、その地名から佐伯を称したと言われています。

緒方洪庵は文化七年(一八一〇)七月十四日、備中足守で佐伯瀬左衛門惟因の第三子として誕生しました。幼名を駢之助せいのすけといい十六歳で元服、田上駢之助惟彰(章)と名乗ります。

洪庵の人生 第一の転機

元服の後、医者になる志を持って大坂にでます。こ

の時、父佐伯^{これより}惟因も大坂の足守藩蔵屋敷の留守居役を命ぜられ、一緒に暮らすことになりました。

文政九年（一八二六）蘭学者中天遊^{なかてんゆう}の私塾、思々齋^{ししきさい}塾に入門して医学を学びます。この時緒方三平と名乗っています。この塾で四年間、当時のオランダ語の訳書本を殆ど読みつくし、西洋の医学学問がおおよそわかるようになっていました。天遊先生から「現在の学問は日々盛んで訳書も多い。自分は老いてこれ以上何もできないが、おまえは原典について直接に学ぶが良い」と言われ、意を決して単身江戸へ行くことにしました。洪庵二十一歳の時でした。

洪庵の人生 第二の転機

天保二年（一八三一）二月、江戸の蘭学者坪井信道^{つばいしんどう}に入門します。江戸での四年間いろいろな事をしながら学費を稼ぎ学びました。この間の修業が、人間緒方洪庵を作り上げたと言われています。坪井信道先生も洪庵に目を掛け、面倒を良く見てくれました。次第に学力もつき、塾頭にまでなっています。先生からも「内外的薬品の事が知りたければ、宇田川^{うだがわしんさい}榛齋に学ぶが良

い」と教えられ、宇田川榛齋の門にも出入りするようになりました。

宇田川榛齋は有名な杉田玄白の教え子で、榛齋の教え子が坪井信道という関係でした。

こうして、江戸での洪庵の勉強は、二人の大家の外、箕作阮甫^{みつくりげんぽ}にも認められるようになり、医者としての将来は十分保証されるようになりました。

しかし、洪庵は当時最先端の学問や医学が伝わっている長崎での修行を決意し、天保七年（一八三三）坪井信道塾を辞めます。

洪庵の人生 第三の転機

天保七年（一八三六）長崎遊学に出発。この時これまで名乗っていた緒方三平（判平）を改め、緒方洪庵と名乗ります。二十七歳の時です。

これを父、佐伯惟因に報告すると、惟因は「^{こうきえんりやく}洪規遠略」かと。名前負けせぬように頑張れよと励まされました。洪庵の洪は洪水など大きいという意味で、庵は医師を表す庵号です。

長崎では誰について学んだかは明らかではありません

せんが、出島のオランダ商館長などに合い直接学んでいた模様です。「長崎に行つた大きな目的は、西洋医薬の現物を見ることにあつたのでは？」とある研究者はかたつています。

当時、江戸では名前が判つていても、現物を見る機会が非常に困難な状況でした。

洪庵は坪井塾で同門の青木周弼、伊東南洋（岡海藏）と共に三人で「袖珍内外方叢」という薬剤処方の本を翻訳し著しています。長崎での修業は二年間で天保九年（一八三八）故郷の足守に帰っています。この時、洪庵には思いがあつて「天然痘の種痘」を少し持ち帰っています。

二ヶ月程故郷で過ごした洪庵は、三月に大坂に出て瓦町にて医者を開業。同時に適々齋塾を開き「蘭方医緒方洪庵」と「適々齋塾」の二枚看板を掲げ、大坂、江戸、長崎での十年余りの修行を打ち上げました。

いよいよ独立した緒方洪庵の活動が始まります。この時洪庵二十九歳でした。

塾の名前「適々齋塾」略して「適塾」と言われました。適塾の床の間に、福沢諭吉の揮毫した掛け軸がありま

す。

適々豈唯風月耳	渺茫塵界自天真
世情休説不如意	無意人乃如意人

適々豈 唯 風月のみならんや
渺茫たる塵界 おのずから天真
世情説くを休めよ 意の如くならずとも
無意の人は 乃ち 如意の人

適々とは、花鳥風月を愛でる自適の境地だけでなく、俗世でさえ己の心に適う生き方をする事。この世は思い通りにならないなどと言うな。無心でやれば道は開ける。自分に適う生き方をし、自分の力で道を切り開いて歩んでいく事を願つて命名したと言われています。出典は、中国古典の莊子の大宗師篇や林羅山の編著童觀抄にある曾子国の文章に由来します。「自分の心に適しみとするところを適しむ」という事を意味します。

この年の七月、撰津名塩の医師、億川百記の娘、八重と結婚しました。八重十七歳、洪庵二十九歳でした。

洪庵の人生 第四の転機

大坂での活動は、天保九年（一八三八）から文久二年（一八六二）まで二十四年間にわたり、蘭学者として、医者として、予防医学殊に種痘事業にひとかたならぬ貢献をされ、また、教育者として、明治維新前後から国の為に本場に役立ち大きな働きをされた多くの人々、大村益次郎、箕作秋坪、橋本左内、大島圭介、長与専斎、福沢諭吉、佐野常民、高松凌雲などの人物を育てています。

塾は、開塾以来盛況で八年後には当初の家が手狭になり、過書町（現在の中央区北浜三丁目三十番地）に家を買って移転しています。現在は「緒方洪庵の自宅及び適塾」として史跡に指定されています。

当時、下級藩士の身分では、家を借りるのは良いが、購入することは問題で、足守藩の兄に迷惑がかかるのを恐れ、八重夫人の実家の使用人（名塩屋熊太郎名義）が購入したように見せかけ、洪庵が月賦で払っています。当時の価格で五百両と言います。

適塾と教育者としての理念と洪庵

洪庵は適塾運営の傍ら、多くの和歌を残しています。荻原弘道先生を師とし、本格的に学んでいます。洪庵が医の道を読んだ句に「天地の神の教えのほかにわが薬師の道の法あらめやば」というのがあり「自然之臣なり」という題がついています。

これは「医者は自然の家来である。自然の法則を知り、これに従って治療を施すほかに、医者としての道はない」という洪庵の医に対する姿勢がうかがえるものです。

「是唯仁術を旨とするのみ」と公言した洪庵は、この考えを適塾の塾生にも示し教育しています。この考え方は洪庵がドイツの医師フーフェランドの医学必携の考えを翻訳した「扶氏医戒の略十二章」に書かれています。

第一章「医の世に生活する者は、人のためのみ、己がためにあらず。という事をその業の本旨とする。安逸を思わず、名利を顧みず、ただ己を捨てて人を救はんことを希うべし」は、その意を表しています。

塾生たちは、師のこの志に善導され力強く育つてい

ったのです。現在の教育目標が経済的成功に流されがちである事を思う時、反省し国家百年の大計から目をそらしてはいけないことを教えていると思います。

長与専齋は回想録「松香私志」に、適塾の事を次の様に書いています。

安政元年（一八五四）、大村を発ち小倉より船便にて大坂に着き、洪庵の門下生となった。この塾は適塾とよばれ四方より来たり、学ぶ者は常に百人を超え、輪講堪えることなし。当時第一の塾なり。

輪講とは塾生を八級に分け、毎級ごと月六回の定日あり。籤で当日の席順を定め、首席者がまず数行の原書を講じ、次席より問いかげ順次末席に至る。一問毎に会頭が勝敗を判定し、勝者に白点、敗者に黒点を付す。そして一ヶ月間の点数を調べ、白点の最多の者がその級の上席とし、三ヶ月続いて上席になると進級する。みな自分自身の工夫を凝らして研究し、学び合ひ学力を戦わす事になる。会頭には塾頭、塾監、一級生の人がなる。月に六回ほど、この解説（輪講）が行われていた様で、何年いたから昇級するとか、卒業するとかはなく、正味の實力を養うというのが事実行われ

ていた。塾生は原書をよく読み、理解する事に達していた、と。

また、こんな話もありました。

専齋は、「実家に帰つて来て家業の医者を早くついでくれ」との催促がたびたびあるようになった。しかし、専齋は「まだ医者としての勉強途中の身なれば、この際江戸に出て、医学の大家について医学の勉強を深めたい」と思い、先生に相談申し上げた処、「いまさら江戸へでて何とする。これからは西洋医学の時がくる。今、長崎にてボムベなる蘭医が医学伝習所にて教えているから、行つて直伝の教授を受け大成を期せられるべし」とのご指導を頂き長崎行きを決意する。適塾にある事六年余り、塾を辞し長崎に向かったと言います。

ここに洪庵の教育者としての見識と自覚がうかがえます。「教育者のその一言により人の一生の歩みが左右される事、大きな影響を与える事も少なくない事。その事は教育者の見識の問題でもあり、また、これを受ける者の知性の問題でもある事」等。

洪庵は漢方医から蘭方医になりました。やがて日本の蘭方医学も行き詰まる事を考え、これからは西洋医

学の時代が来ると認識しました、この見識が長与専斎への助言となったと思われます。洪庵は医者として、蘭学者として、教育者として医学者であるという特異な存在でした。洪庵を高名にしたのも蘭学医としての実績です。当時、蘭学者として有名なのは、江戸では杉田成卿先生（杉田玄白の孫）、大坂では緒方洪庵先生と言われ、福沢諭吉がその翻訳の違いを指摘しています。

杉田先生は「原書をそのまま翻訳しているので、高尚にしてちよっと読んで解り難い」、洪庵先生は「道のため、人の為の心で翻訳しているので、文法明らかで解り易い」直訳と意識の違いを話されています。

現在でも、外国語の習得は一筋縄ではないかない。辞書も少なかった江戸時代、洪庵の語学力はどの位だったのだろうか。

この事について福沢諭吉は自伝の中で「先生の講義を拝聴し、さまざまな説を聞いて、その緻密なる事、その放胆なる事、実に蘭学界の一家、名実ともに違わぬ大人物である」と感心し、塾に帰って朋友相互に「今日の先生のあの卓説はどうだい。我々は頓に無学無識になった様だ」などと話したと述懐しています。

当時、大坂で評判の医者を相撲番付のように東西にわけ順位をつけた「当時流行町医師名集大鑑」が出されています。洪庵は天保十一年に前頭四枚目、弘化二年には関脇、嘉永元年には大関になっています。開業して十年後、洪庵三十九歳の時の事でした。

種痘事業と洪庵

医学者としての活動の中で、最も力を尽くした仕事に種痘事業とコレラ対策が上げられます。

今日、注目を集める疾患は、がん・脳卒中・心臓病等ですが、天然痘は紀元前から世界中で流行を繰り返した最も恐ろしい病気です。

日本で資料的に確かなのは、天平七年（七三五）太宰府管内から流行、多数の犠牲者を出しています。江戸末期でも、人口の1%以上が天然痘により減少したといわれています。江戸時代の医術に痘科という診療科目があったそうです。しかし、それは人痘種痘法で中国式とトルコ式があり、天然痘にかかった人のかさぶたを粉末にして、鼻から薬を吸引する方法（中国式）と、腕や足に疵をつけ粉末を刷り込む（トルコ式）の

二方法でした。人間の体で培養した種痘を接種する
で危険も大きく、本当に天然痘になり死亡する事も多
く治療が難しかったと伝えられています。

嘉永二年（一八四九）、同志と共に種痘事業を始めた
洪庵は、牛痘種痘法を取り入れ、天然痘の予防に力を
注ぎます。この事は徐痘館記録に詳しく書かれていま
す。

寛政八年（一七九六）、牛痘種痘法といつて子牛で培
養した種痘を接種する方法が、イギリスのジェンナー
によつて開発され、嘉永二年（一八四九）蘭医モーニ
ツケが長崎に伝え、いろいろなルートを経て日本全国
に伝わり、中でも大坂でのこの事業が最も良い成績を
上げました。その道のりは決して平らかなものではなく
「町中に悪説流布して、牛痘は益なく害ありと言ひ、牛
痘療法を信じる者一人もなきにいたる」と記していま
す。牛をたべない、牛乳を知らない時代ですから、「牛
痘をすると牛になる」というデマも流されました。
四方八方奔走して勧めること三、四年、ようやく信用
を得ることができるようになりました。この間の苦勞
は「筆舌の尽くすところにあらず」と書かれています。

安政五年（一八五八）になつて、大坂の徐痘館の事
業が幕府にも認められ公認となり、官許を得て拡張し
ました。

万延元年（一八六〇）には、江戸でも種痘所が設置
されました。これが後の東京大学医学部の始まりとな
ります。

佐伯でも天然痘が大流行する

嘉永二年（一八四九）、大坂・江戸や長崎で天然痘が
大流行し、洪庵がその治療に最も有効な牛痘種痘法に
依る治療を行おうとした時、悪説が流布し信じる者が
なく、説得するのに大変苦勞されていた様に、この佐
伯領内でも天然痘が大流行し、目も当てられない程悲
慘な状態でありました。

佐伯藩でも、これまでに再三にわたり天然痘が流行
し病死者が多数出ています。蒲江の正田家文書「当浦
日記」には、「明和八年（一七七二）正月より疱瘡（天
然痘）徘徊、はいかい、当村往古より疱瘡入り申さず候處、この
たび図らずも煩い出で（中略）此度八〇才の老人病み
出候故、古猪串と申し候に退き候えども、又々病出

て候故、男女取るものも取りあえず思い思いに処を立ち退き候え共、他村にても病みつき、是非亡く立ち帰り痘瘡いたし候。病死の者男十三人、女十三人、此度、痘瘡安全の為、殿様よりご祈祷遊ばされ、猶又御米人參など下し置かれ候」と記されている。

これ以後も寛政七年（一七九五）蒲江浦で二十八人が痘瘡で亡くなっている。さらに十二年後の文化四年（一八〇七）再度流行三十余人が亡くなっている。当時は、この天然痘を防ぐ方法として他地域に避難するか、加持祈祷により病魔の終熄を願うかの方法しかなく、多くの人々がこの病気に苦しんでいた。

佐伯藩の蘭方医、三江元節（宮野浦出身の医師）とその門下生、山田俊卿（宮野浦出身）、洪庵の適塾に学び痘瘡予防の術を習い牛痘を持ち帰った井上養春（海崎出身・波當津医師）等が、その牛痘種痘法による治療を行おうと領内に勧めるが、佐伯でも信じる者はなくお手上げの状態でありました。

幸い藩の重臣、矢野光儀が理解を示し、長男の矢野文雄（龍溪）、当時三歳に種痘を試みさせた処、結果が良く、これによりようやく安心して接種を受ける者が

増加し、天然痘の流行を食い止めることができました。佐伯における最初の種痘でした。

私は、この牛痘種痘法が、同じ時期にこの佐伯に伝わっていた事に驚きました。

山田俊卿は、三江元節死後佐伯城下で開業し三江元節の遺児が成長するまで尽力し、佐伯藩の御扶持医になりました。その後俊卿は大阪、東京、神戸等各方面で活躍しました。郷土の先覚者の一人です。大正五年（一九一六）には藍綬褒章を受章しています。

井上養春は、波當津を中心に日向の三川内、古江浦等の浦々を周り地域医療に従事し、明治の学制発布後は教育者としても活躍しています。

コレラの流行と洪庵

天然痘の治療法が見つかり、息つく間もなく今度は、コレラが大流行します。安政五年（一八五八）四月、長崎で流行始めたコレラが、七、八月には大坂で大流行します。続いて江戸でも大流行し三万人がコレラで死んだと言われています。

廣瀬旭莊の日記「日間瑣事備忘」に「火葬場に毎日

二百人が運び込まれ処理できず、棺桶だらけだ」とあり、八月二十七日には「梅田と千日の火葬場の火事も起きて、茶毘所が全焼した」と書かれています。

世人は、これをコロリと言つて恐れ、戦慄くばかりであつた。医者もどう治療したら良いか解らず困つていた。

洪庵は、自分の手元にあつたモスト、カンスタット、コンジラの三つの本から、コレラに関する項を翻訳し、その説を一つにまとめ、自分の経験も交えて正しい治療法を示しました。「虎狼痢治療」と題したこの書は、八月下旬に刊行され百部が無料で配布されました。

また、これとは別に「家塾虎狼痢治則」と題した「コレラ治療法」を簡潔に要領よく書いた小冊子も出し、恩師や門人に送っています。

この時、松本良順から強い抗議があつたが、それに対し誤りの部分を訂正し発行した。また、この松本良順氏に対し、「もし松本君の責めなかりしば、余はまさに、その過ちを万世に伝え、不朽に流せんとせり。君の賜物大ならざるや」と書いています。洪庵の心の広さ、暖かさがわかりました。

洪庵の人生 第五の転機

文久二年（一八六二）八月、五十三歳の洪庵は、急に幕府に召され、奥医師にとの内交渉があり、再三辞退するも、とうとう事情やむなきを得ず、お受けすることになりました。

それまで、実質的には、町医者であつた洪庵が公の医者になつたのです。と同時に西洋医学所頭取にも任命されました。

大坂の適塾は、養子の緒方拙齋（四女八千代の婿）に留守を頼むことにし、江戸に引越すことになりました。奥医師としての活動は「勤仕向日記」に詳しくしめられています。

文久二年（一八六二）、麻疹が流行し、十月初め、奥女中が感染し、月末には將軍家茂と和宮がかかり、十一月に入ると天璋院（篤姫）十三代將軍家定正室）が発症し、洪庵と西洋医学所取締補の林洞海が徹夜で介抱に努めています。天璋院は治癒の祝い、月見や誕生祝いなどにお招きくだされ、御祝儀などを下されています。余ほど気に入られたのでしょうか。

奥医師としての洪庵の年俸は、就任時の三十人扶持

と足高あしたか(在職中の職人給の不足分)としての追加の手

当を含め米二百俵、御番料が二百俵、それに西洋医学所頭取として三十人扶持であった。一人扶持を米四、五俵と換算すると合計五三五俵の年俸となります。

父の佐伯惟因が足守藩から受けていた給与が三十三俵十八人扶持(一一四俵)であった事に比べると、まさに大出世でした。それは、身に余る光榮に違いなかったが、大坂での気楽な生活に比べれば、余りにも窮屈で気疲れする事ばかりであったらうと考えられます。その上、出世に伴う出費も激増しました。

家来を十人も召し抱え、勤務用の諸道具、衣服、大小刀まで新調しなければならず、これまでに四百両ほども使いました。いずれは家をも建てねばならず、五百両はかかると言います。今までの蓄えだけでは足らず借金しなければならなくなりました。

「身分は高くなつたが、大貧乏人になつてしまつた」と当時、長崎に遊学していた次男、洪哉(惟準)に宛てた手紙に書かれてあります。奥医師という特異な世界に巻き込まれた洪庵の経済上の負担による大きな心労が偲ばれます。

洪庵の突然の死

江戸で勤め始めて僅か十ヶ月。八重婦人と子供六人をやつと江戸によびよせ、賑やかな生活を始めた矢先の文久三年(一八六三)下谷御徒町の医学所頭取屋敷で、昼寝から目覚めた時、突然多量の咯血をし窒息のため亡くなられました。原因は肺結核とも、胃病とも、食道静脈瘤破裂とも言われています。遺体は江戸駒込(現東京都文京区)の高林寺に埋葬されています。

八重夫人は九人の子どもを抱え、その苦勞は大変なものでありました。この事は西岡まさ子著「緒方洪庵の妻」に詳しく書かれています。

洪庵亡き後、次男洪哉(惟準)は医学所教授に任じられ、慶應三年(一八六六)にはオランダへ留学。三男惟孝はロシアに留学。五男惟直はフランスへ留学しています。

大坂の適塾は、四女八千代の婿で嗣養子になつた拙齋が引き続き預かり明治十九年まで開かれています。